

## 基礎看護技術の教育内容に関する検討

### — 基礎看護技術のテキストにおける看護技術の方法を比較して(その1) —

関谷 由香里\*, 青木 光子\*, 岡田 ルリ子\*, 酒井 淳子\*  
徳永 なみじ\*, 相原 ひろみ\*, 岡部 喜代子\*

## Investigation of Educational Contents in Fundamental Nursing Skills Bibliographical Research on Fundamental Nursing Skills(No.1)

Yukari SEKIYA, Mitsuko AOKI, Ruriko OKADA, Junko SAKAI  
Namiji TOKUNAGA, Hiromi AIBARA, Kiyoko OKABE

### 序 文 方 法

現在、臨床では、新人看護師の看護実践能力低下に対して、各施設独自の教育プログラムが立てられ、基礎看護技術も重点的に再教育がなされている<sup>1)</sup>。一方、看護系大学の教育については、看護実践能力育成の向上を図るべく、看護学教育の在り方に関する検討会からその指針が報告されている<sup>2),3)</sup>。さらには、厚生労働省から「臨地実習において看護学生が行う基本的な看護技術の水準」<sup>4)</sup>が報告されており、基礎看護技術の教育としては、最低限ここで示された「基本的な看護技術」が臨地実習において実践できるレベルを目標とすることが望ましい。

そこで、基礎看護学講座では、本学の学生の看護実践能力の向上を目指して、従来の基礎看護技術の教育内容を抜本的に見直し、新たな基礎看護技術の教育内容を構築するために段階的な研究的取り組みを行うこととした。

本研究では、その第1段階として、看護実践能力の主要な要素である基礎看護技術に関する教授項目と教授する看護技術の方法を知るために、基礎看護技術の知識が体系化されており、広く看護教育機関で活用されていると思われる看護基礎教育用テキストの記述内容について検討することとした。

本稿では、その中で、わが国において伝統と実績のある4社5冊<sup>(脚1)</sup>の基礎看護技術のテキストを研究対象として、内容分析に準じた方法を用いて、各テキストから“看護行為に共通する技術”“診療に伴う援助技術”に関する最大公約数的な看護技術の方法を抽出・検討し、新たな基礎看護技術の教育内容を構築するための基礎資料が得られたのでここに報告する。

#### 1. 研究期間：平成16年4月～9月

#### 2. 研究対象

データベースNACSIS Webcatで「基礎看護学」「基礎看護技術」をキーワードに検索した結果15件、同NDL-OPACで「基礎看護学」「基礎看護技術」をキーワードに検索した結果16件の和図書(以下、テキスト)が検出された。その中で著者名、タイトル、出版社が同じで最新版のものは前者が5件、後者が4件であった。その中で重複していた4件のテキストを研究対象とした。また、本学で基礎看護学を教授している教員が共通して参考にし、基礎看護技術のテキストとして伝統と実績があり、著者が基礎看護技術に関する研究の先駆者であるテキスト1冊を上記4件に加え、4社5冊の基礎看護技術のテキストを研究対象とした(表1)。

表1 研究対象としたテキスト

テキスト	出版年・版数
A 社	2002年・第13版
B 社	2004年・第5版
C 社	2002年・第2版
D 社	2003年・第5版
E 社	1997年・第1版

#### 3. 基礎看護技術のテキストの比較・抽出・検討方法

各テキストの看護技術の方法に関する記述を熟読し、内容分析<sup>5)</sup>の方法に準じて、分析単位を基礎看護技術項目、基礎看護技術の方法に関する「語」として、基礎看護技術項目毎に、最多の記述に対応できる一覧

\*愛媛県立医療技術大学保健科学部看護学科

表を作成し、比較を行った。次に、出現頻度を一つの指標として、出版社が共通するテキストは、相互に補完することも考慮に入れ、4社4冊以上のテキストに共通してみられた、基礎看護技術の方法に関する項目を抽出し、記述内容を詳細に検討した。

#### 4. 用語の定義

##### 1) 基礎看護技術

看護の初学者が学ぶ、各看護学の看護技術の基礎となる看護技術をいう。本研究では、“看護行為に共通する技術”“日常生活に対する援助技術”“診療に伴う援助技術”に大別している。

##### 2) 看護技術の方法

本来、看護技術の方法とは、対象者の観察・情報収集、対象者のアセスメント、対象者に応じた看護技術の方法の選択(判断)、必要物品の準備、看護技術の実施、後片付け、実施した看護技術の評価という一連のプロセスをさす。しかし、本稿で報告する“看護行為に共通する技術”“診療に伴う援助技術”に関しては、上記プロセスの「看護技術の実施」方法が選択した物品によってほぼ既定されるので、ここでは使用される物品と「看護技術」の実施を指している。

## 結 果

本研究では、内容分析の方法に準じ、出現頻度を一つの指標として検討した4社4冊以上のテキストに共通する基礎看護技術項目ならびに物品を用いた方法(以下、共通する看護技術の方法)を、研究目的である最大公約数的な基礎看護技術の方法とし、表2~11の該当する行に網掛けで示した。また、各テキストにおける基礎看護技術の項目に関する記述内容については、項目のみ、項目と詳細な説明を加えているもの、表の中で項目と簡略化した説明を加えているものと、それぞれの項目の取り上げ方に差異がみられたが、いずれも記述があるものとして、表では○で示している。なお、各表の上位項目は《 》で、下位項目である、物品に既定された実施方法を文中では〈 〉で表記した。

#### 1. 看護行為に共通する技術

##### 1) 安全・感染予防

各テキストにおける安全・感染予防に関する項目の記述の有無についてまとめたものが表2である。安全に関する共通する看護技術の方法はなかった。

《感染予防》に関する項目は、〈流水+石鹸+ペーパータオルを用いた手洗い〉〈薬液消毒法〉〈日光消毒法〉〈低温消毒法〉〈煮沸消毒法〉〈高圧蒸気滅菌法〉〈ガス滅菌法〉〈火炎滅菌法〉〈放射線滅菌法〉、《無

表2 安全に関する技術項目の物品・方法

項 目	方 法	A社	B社 分冊	C社	D社	E社	
事故防止	抑 制	シート		○		○ ○	
		抑制衣		○		○ ○	
		紐		○		○ ○	
		ベッド柵		○			
		抑制用具		○		○ ○	
	転落予防			○		○	
	転倒予防			○		○	
	褥瘡予防			○			
	巻法や予薬時の安全			○			
感染予防	手 洗 い	流水とペーパータオル	○	○	○	○ ○	
		ベースン		○		○ ○	
		擦り込み法			○	○ ○	
	消 毒 法	薬液消毒法	○	○	○	○ ○	
		薬液希釈計算		○			
		日光消毒法	○	○	○	○ ○	
		低温消毒法		○	○	○ ○	
		煮沸消毒法		○	○	○ ○	
	滅 菌 法	高圧蒸気	○	○			○
		ガス滅菌法		○	○	○	○
		火炎滅菌法		○	○	○	○
		放射線滅菌法		○	○	○	○
		滅菌バック	○				
		ケッテル	○				
		包 布	○				
	無菌操作	○	○	○	○	○	
	滅菌手袋	○		○	○		
	鉗子立て	○	○			○	
	鉗子立て(消毒薬入り)	○	○		○		
	鉗子の取り扱い				○	○	
	鑷子の取り扱い	○			○		
	鑷子の個装	○					
	綿球の受け渡し		○			○	
	滅菌バック		○		○		
	包 布		○		○		
	消毒缶の開け方				○		
隔 離	ガウンテクニック	綿	○	○	○	○ ○	
		デイスポ		○	○		
	感染性廃棄物の処理		○	○	○		

菌操作》、《ガウンテクニック》であった。

##### 2) バイタルサインの測定

バイタルサインの測定に関する項目の記述の有無についてまとめたものが表3である。共通する看護技術の方法として、《バイタルサインの測定》に関する項目は、〈水銀体温計を用いた腋窩・口腔・直腸の温度測定〉〈手指による脈拍測定(橈骨動脈)〉〈視診による呼吸測定〉〈Ⅲ-3方式あるいは3・3・9方式による意識レベルの測定〉であった。

##### 3) 身体計測・フィジカルアセスメント

身体計測に関する記述の有無をまとめたものが表4である。共通する看護技術の方法として、身体測定に関する項目は、〈身長測定〉〈体重測定〉〈座高測定〉〈胸囲測定〉〈肺活量測定〉〈腹囲測定〉であった。

フィジカルアセスメントに関しては、4社のうち

表3 バイタルサインに関する技術項目の物品・方法

項目方法	方 法	A社	B社 (分冊)	C社	D社	E社
体温測定	水銀体温計	腋窩	○	○	○	○
		口腔	○	○	○	○
		直腸		○	○	○
	電子体温計	腋窩				○
		口腔				○
		直腸				
	耳孔		○		○	
脈拍測定	手 指	橈骨動脈	○	○	○	○
		上腕動脈		○		
	プルスメータ		○			
	心尖拍動聴取				○	
呼吸測定	視 診	○	○	○	○	
	聴 診			○	○	
	紙片や器具		○			
血圧測定	水銀血圧計					
	電子血圧計					
意識レベル						
メイヨークリニック			○			
3・3・9方式		○	○	○	○	
グラスゴー方式			○	○		

表4 身体計測に関する技術項目の物品・方法

項 目	方 法	A社	B社 (分冊)	C社	D社	E社
身体計測	身 長	○	○	○	○	○
	体 重	○	○	○	○	○
	座 高	○	○	○	○	○
	胸 囲	○	○	○	○	○
	背 筋 力	○				
	肺 活 量	○	○	○		○
	腹 囲	○	○	○		○
	関節可動域			○	○	○
	体 脂 肪	○	○			○
	皮下脂肪厚	○	○		○	
	握 力		○	○		○
	頭 囲	○				

1社は基礎看護技術項目として取り上げられておらず、共通する看護技術の方法はあげられなかった。

## 2. 診療に伴う援助技術

### 1) 薬物療法

薬物療法に関する項目の記述の有無をまとめたものが表5である。共通する看護技術の方法として、《経口与薬法》では、〈食前薬・食後薬・食間薬・時間薬・就寝前薬の投与方法〉〈即効性製剤〉、《口腔内与薬》、《直腸内与薬》であった。《注射法》では、注射方法として〈皮下注射〉〈筋肉内注射〉〈静脈内注射〉〈点滴静脈内注射〉であった。注射に関する項目では、《注射薬の取り扱い(アンプル・バイアル瓶)》《注射器の取り扱い(ガラス・プラスチック)》《注射針の取り扱い(RB・SB・翼状針)》であった。《注射部位》については、〈皮下注射〉が〈三角筋の中央部〉〈上腕後側正中線下1/3の部位〉、〈筋

表5 薬物療法に関する技術項目の物品・方法

項 目	方 法	A社	B社 (分冊)	C社	D社	E社	
経口与薬	食前薬	○	○	○		○	
	食後薬	○	○	○		○	
	食間薬	○	○	○		○	
	時間ごと薬	○	○	○		○	
	就寝時薬	○		○		○	
	臨時(検査など)		○			○	
	液 剤	溶液				○	○
		懸濁剤			○	○	○
		乳剤			○	○	○
		シロップ剤		○	○		○
		油剤					○
	固 形	速効性製剤(カプセル・散剤・顆粒・錠剤)	○	○	○	○	○
		徐放性製剤					○
		腸溶性製剤					○
		舌下錠		○	○		○
		トローチ剤		○	○		○
		パッカル剤		○	○		○
		舐剤					○
	オブラート	○	○	○			
	口腔内与薬		○	○	○	○	
直腸内与薬		○	○	○	○		
膣内与薬				○	○		
尿道内与薬			○				
注 射 法	皮下注射	○	○	○	○	○	
	皮内注射	○	○			○	
	筋肉内注射	○	○	○	○	○	
	静脈内注射	○	○	○	○	○	
	点滴静脈内注射	○	○	○	○	○	
	動脈内注射		○			○	
	脊髄内注射					○	
	関節内注射					○	
	体腔内注射					○	
	注 射 薬	アンプルの取り扱い		○	○	○	
	バイアルの取り扱い		○	○	○		
注 射 器	ガラス製		○	○	○		
	プラスチック製		○	○	(合成樹脂) ○		
注 射 針	R B	○	○	○	○		
	S B	○	○	○	○		
	(16G~27G)						
	丸 針	○					
	角 針	○					
	翼状針	○					
	静脈針	○	○				
	静脈留置針	○	○				
	小児用頭皮針						
	注 射 部 位	皮 下	三角筋前半部				○
三角筋の中央部			○	○	○		
大腿前外側中央部				○			
筋 肉		上腕後側正中線下1/3の部位	○	○	○	○	
		中殿筋部			○		
		中殿筋部			○		
静 脈		三角筋前半部					
		三角筋の中央部	○	○	○		
		大腿前外側中央部		○		○	
		クラークの部位	○	○	○		
	上殿半月前半部				○		
	殿部上方外側(ホッホシュテッター)		○	○	○		
皮 内	4分3分法	○	○		○		
	前腕屈側の皮膚	○	○		○		
	外頸静脈	○	○				
	肘正中皮静脈	○	○	○			
	橈側前腕皮静脈	○	○	○			
	尺側前腕皮静脈	○	○	○			
	前腕正中皮静脈	○	○	○			
	背側中手静脈				○		
	手背静脈網		○	○			
	大伏在静脈		○		○		
輸 血 法	小伏在静脈		○				
	足背静脈網		○				
	咽 頭	○	○		○		
	皮膚	○	○	○	○		
塗 布・塗 擦 法	結 膜	○	○	○			
	粘 膜				○		
点 眼 法			○	○	○		
			○	○	○		
注 入 法	膀胱				○		
	結腸				○		
薬物の管理		○	○	○	○		

肉注射)が〈三角筋の中央部〉〈クラークの部位〉〈ホッホシュテッターの部位〉,〈皮内注射〉が〈前腕屈側の皮膚〉,〈静脈内注射〉が〈肘正中皮静脈〉〈橈側前腕皮静脈〉〈尺側前腕皮静脈〉であった。

その他,《輸血法》,《塗布・塗擦法》の〈皮膚塗擦法〉,《点眼法》,《薬物の管理》があった。

## 2) 包帯法

包帯法に関する項目の記述の有無をまとめたもの

表6 包帯法に関する技術項目の物品・方法

項目	方法	A社	B社 分冊	C社	D社	E社	
材 質	ガ ー ゼ	○	○	○		○	
	綿 花 布	○	○	○			
	木 綿 布	○	○	○		○	
	フ ラ ン ネ ル	○	○	○			
	絆 創 膏	○	○	○		○	
包帯の分類	防 水 紙	○	○	○		○	
	硬 材 料	○	○	○		○	
	巻 軸 包 帯	○	○	○	○	○	
	布 帛 包 帯		○		○		
	複 製 包 帯		○	○		○	
	絆 創 膏 包 帯		○	○		○	
	硬 化 包 帯		○	○	○		
	副 子 包 帯		○	○	○		
	安置(安楽)包帯		○				
	薬 物 包 帯		○	○			
	伸 縮 包 帯		○	○		○	
	弾 性 包 帯		○	○		○	
	伸縮糸チューブ包帯		○	○	○	○	
	ラ ッ ク		○	○			
巻軸包帯の 種 類	ウレタンフォーム		○				
	弾力ストッキング			○			
	噴霧アクリル被覆材			○			
	単 頭 帯		○				
	二 頭 帯		○				
	多 頭 帯		○				
	巻軸包帯の 用 い 方	環 行 帯	○	○	○	○	○
		螺 旋 帯	○	○	○	○	○
		蛇 行 帯	○	○		○	○
		折 転 帯	○	○	○	○	○
上 行 麦 穂 帯		○	○	○	○	○	
下 行 麦 穂 帯		○	○	○	○		
離 開 亀 甲 帯		○	○	○	○	○	
集 合 亀 甲 帯		○	○	○	○	○	
反 復 帯			○		○	○	
三 節 帯		○			○		
つ な ぎ 方			○				
留 め 方			○				
解 き 方			○				
巻 き 方		○	○	○	○	○	
提 肘 三 角 巾			○	○	○		
腹 帯		腹帯のしめ方	○	○	○	○	
	マジックテープ腹帯			○			
T 字 帯	T字帯のしめ方	○	○	○	○		
	T字帯パンツ型			○			
絆 創 膏	投 石 帯		○				
	張 り 方		○	○			
	は が し 方		○	○			

が表6である。共通する看護技術の方法として,《包帯の材質》は,〈ガーゼ〉〈木綿布〉〈絆創膏〉〈防水紙〉〈硬材料〉であり,《包帯の種類》は,〈巻軸包帯〉〈伸縮チューブ帯〉であった。《巻軸包帯の使い方》は,〈環行帯〉〈螺旋帯〉〈折転帯〉〈上行・下行麦穂帯〉〈離開・集合亀甲帯〉であった。

その他,《三角巾の巻き方》,《腹帯のしめ方》,《T字帯のしめ方》があった。

## 3) 罨 法

罨法に関する項目の記述の有無をまとめたものが表7である。共通する看護技術の方法として,《湿性温罨法》は,〈温湿布〉〈ハップ〉,《乾性温罨法》は,〈湯たんぽ〉〈電気あんか〉であった。《冷水罨法》は,〈冷湿布〉,《氷罨法》は,〈氷枕〉〈氷嚢〉〈氷頸〉であった。

## 4) 吸入・酸素吸入

吸入・酸素吸入に関する項目の記述の有無をまとめたものが表8である。共通する看護技術の方法として,《吸入》では,〈超音波ネブライザー〉〈ハンドネブライザー〉であった。《酸素吸入》では,〈中央配管・酸素ボンベによる酸素供給〉〈鼻カニューラ・フェイスマスクによる酸素吸入〉〈酸素ボンベによる在宅酸素療法〉であった。

## 5) 吸 引

吸引に関する項目の記述の有無をまとめたものが

表7 罨法に関する技術項目の物品・方法

項目	方法	A社	B社 分冊	C社	D社	E社
湿性温罨法	温 湿 布	○	○	○	○	○
	ハップ(巴布)	○	○	○	○	○
	部 分 温 浴		○	○		○
	部 分 蒸 気 浴		○			
乾性温罨法	蒸 気 吸 入		○			
	湯 た ん ぽ	○	○	○	○	○
	か い ろ	○	○	○	○	
	電 気 あ ん か		○	○	○	○
	熱 気 浴		○	○		
	光 線 照 射		○			
	C M C 製 品		○			○
	電 気 毛 布		○	○	○	
	電 気 シ ー ツ		○		○	
	電 気 ス リ ッ パ				○	
冷 水 罨 法	電 気 座 布 団				○	
	冷 湿 布	○	○	○	○	○
	冷 ハ ッ プ		○	○		
氷 罨 法	部 分 冷 浴			○		
	氷 枕	○	○	○	○	○
	氷 嚢	○	○	○	○	○
	氷 頸	○	○	○		○
CMC製品		○	○			
アイスマット			○			
マジックバック					○	
エバーアイス					○	
アイスノン					○	

表9である。《吸引》は、〈中央配管〉の吸引器による〈口・鼻腔内の一時的吸引〉、〈動力一体型胸腔吸引器を用いた持続吸引〉であった。

#### 6) 浣腸

浣腸に関する項目の記述の有無をまとめたものが表10である。共通する看護技術の方法として、《浣腸》の種類では、〈浣腸器とネラトンカテーテルを用いたグリセリン浣腸〉〈ディスポーザブルグリセリン浣腸〉〈イリゲーターとネラトンカテーテルを用いた高圧浣腸〉であった。

#### 7) 導尿

導尿に関する項目の記述の有無をまとめたものが表11である。共通する看護技術の方法として、《導尿》

は、〈ネラトンカテーテルと滅菌手袋を用いた男性・女性の一時的導尿〉〈留置カテーテル〉であった。

表10 浣腸に関する技術項目の物品・方法

項目	方法	A社	B社 (分冊)	C社	D社	E社
グリセリン浣腸	浣腸器 +ネラトンカテーテル	○	○		○	○
	ディスポ		○	○	○	○
高圧浣腸	イリゲーター +ネラトンカテーテル	○		○	○	○
駆風浣腸			○			
ストーマケア				○		○
摘便		○	○			
腸洗浄				○		

表8 吸入・酸素療法に関する技術項目の物品・方法

項目	方法	A社	B社 (分冊)	C社	D社	E社
吸入	加熱式加湿器				○	
	気泡式加湿器				○	
	ジェットネブライザー				○	
	超音波ネブライザー		○	○	○	○
	ハンドネブライザー		○	○	○	○
	定量式携帯吸入器			○		
酸素吸入						
酸素供給	パルスオキシメーター				○	
	中央配管		○	○	○	○
	酸素ボンベ		○	○	○	○
酸素吸入の方法	経鼻カテーテル		○			○
	鼻カニューラ		○	○	○	○
	フェイスマスク		○	○	○	○
	リザーバーマスク		○	○	○	
	酸素テント		○		○	○
在宅酸素療法		○		○		
酸素供給	酸素濃縮器		○		○	○
	酸素ボンベ		○	○	○	○
	在宅人工呼吸療法				○	
	人工呼吸器		○	○		○
人工呼吸		○			○	

表9 吸引に関する技術項目の物品・方法

項目	方法	A社	B社 (分冊)	C社	D社	E社
一時吸引	気管内吸引				○	
	口・鼻腔内吸引					
	ネラトンカテーテル		○	○	○	○
	ディスポカテーテル		○			
	中央配管吸引システム		○	○	○	○
電動式吸引器						
持続吸引	低圧持続吸引					
	サイフォンの原理式			○		
	3連ボトル			○		
	メラサキューム		○	○	○	○
リリアバッグ			○			
携帯式持続吸引					○	

表11 導尿に関する技術項目の物品・方法

項目	方法	A社	B社 (分冊)	C社	D社	E社
一時的導尿	ネラトンカテーテル	○	○	○		○
	ディスポカテーテル		○		○	
	滅菌手袋		○	○	○	○
	滅菌ガーゼ	○			○	
男性		○	○	○	○	
女性		○	○	○	○	○
留置カテーテル		○	○		○	○
自己導尿法		○			○	
ウロストーマケア						○
用手・腹圧排尿法		○				
一時的膀胱洗浄			○			
持続的膀胱洗浄			○			

## 考 察

### 1. 看護行為に共通する技術

「安全・感染予防」に関する看護技術の項目は、今日、看護専門職がその対象者を守ると共に自らを守る上で、必ず修得する必要がある基礎看護技術項目である。したがって、看護の初学者といえども必ず実践できなければならない。基礎看護技術として、結果1で示された項目を最低限の「安全・感染予防」に関する技術の方法として、それに付加して、最新の「安全・感染予防」に関する研究報告や、既に示されている「スタンダードプリコーション」<sup>6)</sup>に含まれている項目も取り入れながら、教授していく必要があると考えられる。

「バイタルサインの測定」に関しては、共通する看護技術の方法として抽出したバイタルサインの測定に関する項目〈水銀体温計を用いた腋窩・口腔・直腸の温度測定〉は、川端他<sup>7)</sup>の報告では、電子体温計を用いている。また、本学の実習病院における体温測定もすでに電子体温計を使用するようになって久しい。体温測定と同様に、血圧測定も電子血圧計を使用することが

多くなっている。したがって、「バイタルサインの測定」の記述内容に関する傾向としては、臨床の現状との乖離が著しいと言える。本項目のように、臨床で行われている技術の方法と、教授内容との乖離を少なくするためには、常に臨床における看護技術の現状を把握し、教授内容に反映させる必要があると考えられる。

「身体計測・フィジカルアセスメント」に関しては、上記の「バイタルサインの測定」も含めて、フィジカルアセスメントあるいはヘルスアセスメントとして、基礎看護学では独立した科目として教授される傾向にある。その背景には、社会における在宅医療・介護のニーズが増大していることが考えられる。つまり、看護専門職が広く社会で、確たる判断根拠に依拠した看護ケアを実施・評価する機会が多くなっているということである。また、看護専門職として、対象を理解するうえで、他の医療職と共通言語を持ち、診査技術を身につけることは、時と場所を問わず、看護ケアの実施、評価の判断根拠を得ることであり、大変有意義なことである<sup>8)</sup>。したがって、フィジカルアセスメントあるいはヘルスアセスメントに関しては、この度研究対象とした基礎看護技術のテキストの記述内容のみでは、確固とした判断根拠となる知識と診査技術を教授するという点で限界が見られ、フィジカルアセスメントあるいはヘルスアセスメントに関する専門書あるいはテキストを使用する必要があると考えられる。

## 2. 診療に伴う援助技術

結果2. に示したように、各援助技術であげられている項目は多種多様である。これは、現在の医療の高度化・多様化・複雑化を反映し、医療の場における看護職者の、診療に伴う援助技術も増大していると考えられる。つまり、診療に伴う援助技術に用いられる物品も日進月歩で、それと同時に援助方法もめまぐるしく変わっていることは想像に難くない。本研究で、診療に伴う援助技術の方法として抽出した項目、たとえば、包帯法の綿包帯を使用する方法や注射法のガラス製の注射器を使用する方法など、前節の「バイタルサインの測定」と同様に、臨床で実践されている援助技術とは乖離していると考えられる項目も多々あった。

また、「吸入・酸素吸入」「吸引」「浣腸」「導尿」の援助技術は、在宅医療の進歩に伴って、自己管理へと移り変わりつつある。したがって、今後これらの援助技術の教育には、指導技術も加味されることは想像に難くない。果たしてこれらの援助技術を、基礎看護技術としてどのように取り上げていくのかについては、今後検討の余地があると考えられる。

本研究では、結果(表2～11)に示したように、4社5冊のテキストを比較し、最大公約数的な看護技術の

方法を抽出・検討した。しかし、池亀・宮城<sup>9)</sup>が指摘しているように、テキストのみでは基礎看護技術の教育内容としては十分ではない。特に、臨床で実践されている看護技術の方法との乖離が見られる記述も多々あった。今後は、高橋他<sup>10)</sup>が述べているように、大学の基礎看護技術教育の基礎あるいは基本となるものを明確にすることが重要な課題であり、それに基づいて、基礎看護技術の教育内容を再構築していきたい。

## 引用文献

- 1) 日高みえ子, 瀬戸美佐子: 入職後1カ月間を基礎技術習得期間に充てる教育プログラム, 看護, 55(8), 036-039, 2003
- 2) 看護教育の在り方に関する検討会報告: 大学における看護実践能力の育成充実に向けて, 看護教育, 43(5), 411-431, 2002
- 3) 看護教育の在り方に関する検討会報告: 看護実践能力の育成に向けた大学卒業時の到達目標, 看護教育, 45(6), 439-462, 2004
- 4) 厚生労働省看護課: 看護基礎教育における技術教育のあり方に関する検討会報告書, 1-9, 2002
- 5) 橋元良明: メッセージ分析, 人間科学研究法ハンドブック, 高橋順一, 渡部文夫, 大淵憲一編著, ナカニシヤ出版, pp.75-82, 1998
- 6) 「医療の安全に関する研究会」安全教育分科会編: ユニバーサルプレコーション実践マニュアル, 南光堂, 1998
- 7) 川端麻衣子, 島田千恵子, 山口瑞穂子, 服部恵子, 永野光子, 小元まき子, 西村あをい: 看護技術を支える知識に関する一考察—バイタルサイン測定に関する文献を通して—, 順天堂医療短期大学紀要, 14, 161-171, 2003
- 8) ケイコ・イマイ・キシ: 看護にとってのフィジカル・アセスメント, 看護技術, 41(6), 554-555, 1995
- 9) 池亀俊美, 宮城恵理子: 看護技術の再構築, Nursing Today, 15(4), 76-79, 2000
- 10) 高橋有里, 柴田千衣, 菊池和子, 平野昭彦, 伊藤道子, 石井トク, 布佐真理子, 三浦まゆみ, 石田陽子, 高橋みや子, 兼松百合子: 医療の進歩と看護ニーズの変化に対応する「基礎看護学」の教育内容の検討—基礎看護技術の分析から—, 岩手県立大学看護学部紀要, 3, 113-120, 2001

## 要 旨

基礎看護学講座では、新たな基礎看護技術教育の教育内容を構築するために、段階的な研究的取り組みを行うこととした。

本稿ではその第1段階として、看護職の基礎的な知識の拠り所となっている、看護基礎教育用のテキストとして伝統と実績のある4社5冊のテキストについて、内容分析の方法に準じて、看護技術の方法に関する検討を行った。以下のような結果を得たのでここに報告する。

“看護行為に共通する技術”では、安全・感染予防に関する看護技術の方法は各テキストにばらつきが見られたが、バイタルサインの測定・身体計測の項目については共通する方法が多く見られた。“診療に伴う援助技術”では、全項目に関する看護技術の方法は、医療の高度化・多様化・複雑化の影響を受け多種多様であり、おおよそ5冊のテキストに共通する方法と1冊のテキストにしかあげられていない方法とに大別できた。

## 脚 注

- 1 B社のテキストは分冊であるが、ここでは1冊として取り扱う。